

論文審査の結果の要旨

氏名 高橋 亨

本論文は、『源氏物語』のような物語テキストが11世紀初頭の平安朝において生まれるに至る過程を、物語の起源にまで遡って通時的に考察したうえで、『源氏物語』自体の思想と表現の詩学を徹底的に究明し、さらにその思想と表現が後の時代にどのように継承されたかを、近世までをも視野に入れて追尋したものである。論文の構成は、第Ⅰ部「かな物語の生成と和漢の心的遠近法」、第Ⅱ部「源氏物語の詩学と語りの心的遠近法」、第Ⅲ部「物語論の生成と〈女〉文化の行方」の三部からなる。

『源氏物語』を織りなすテキストは、近代の通常の散文とは異なり、縁語・掛詞の修辞が成り立つ和歌と同質の言葉によって生成されたテキストである。その思想と表現を考究する本論文が「源氏物語の詩学」と題されるゆえんであるが、そのテキスト生成の機微を分析するために、本論文では「同化と異化の心的遠近法」という概念が用いられている。これは、主として二つの位相の分析に適用される。一つは、「引用の織物」(バルト)としてのテキストの、そのテキスト相互関連性の分析に、いま一つは語りの分析にであるが、この二つの位相を有機的に結びつけつつ、物語の思想と表現の不可分なありようを彫り深く浮かび上がらせたところに、本論文の最大の成果がある。

第Ⅰ部では、漢文で綴られた記紀の伝承や神仙譚を母胎として『竹取物語』のような初期物語が生まれてきたとき、かなによる自在な表現を得た語りの心的遠近法によって、漢文の神話や神仙譚との交渉を内在させつつも(同化)、現世の人間に焦点化する決定的な変換(異化)が起こったとする。また、『古今集』の規範的な季節の美意識を基底にしつつ、それを異化し豊饒化する『古今六帖』や『枕草子』『うつほ物語』等の歳時意識が、『源氏物語』の時間を織りなしていることを指摘した意義も大きい。

第Ⅱ部では、主語の省略や敬語の有無、多様な人物呼称等によりいっそう精錬された『源氏物語』における語りの心的遠近法が、作中人物に対する共感的な同化とアイロニカルな異化との間をしなやかに往還しつつ、仏教的な彼岸や、琴に象徴される超越的な世界との緊張的な関係を保ちながら、現世を超脱し得ない人間のありようを陰翳深く描出している様相を克明に明らかにしている。

第Ⅲ部では、『紫式部日記』に描かれた作者の精神のありようが、上記のような『源氏物語』の世界ときわめて深い親縁性を有することを丹念に析出し、後の『無名草子』のなかに、『源氏物語』を歌道の正典化した藤原俊成や定家らとは異なる、王朝〈女〉文化の継承があることを指摘している。

本論文には、論述がやや抽象的に過ぎて難解になっている箇所もないではないが、審査委員会は上述のような諸点を高く評価し、本論文が博士(文学)の学位に十分に値するものとの結論に達した。